

Title	知的障害者スポーツにおけるマネジメントモデル構築に関する研究 - 若年層ボランティアの活動継続性向上を企図して -
Author(s)	大山, 祐太
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	http://hdl.handle.net/10129/6057
Rights	
Text version	author



<http://repository.ul.hirosaki-u.ac.jp/dspace/>

論文審査及び最終試験結果報告書

課程博士	地域社会研究科 地域社会専攻 地域政策研究講座		
学籍番号	11GR103	氏名	大山 祐太
審査委員	主査	増田 貴人	
	副査	北原 啓司	
	副査	佐々木 純一郎	

(論文題目)

知的障害者スポーツにおけるマネジメントモデル構築に関する研究
—若年層ボランティアの活動継続性向上を企図して—

(論文審査の要旨)

本研究は、知的障害者スポーツにおけるボランティアの継続参加や活動継続困難要因についての分析をふまえ、公共政策・NPO ボランティアにおける Hobson et al. のボランティアマネジメントモデルを援用して、知的障害者スポーツにおける実効性のあるボランティアマネジメントモデルの構築を試みようとしたものである。なかでも、ボランティア活動に定着しにくい潜在的な層として期待されている若年層の積極的活用を意図してモデル構築を目指そうとしたことを強調している。

論文内容として、まず、ボランティアの負担感について定量的に分析を進め、コーチングにおける課題やボランティア活動で生じる人間関係、参加コスト、責務の強度が離脱企図経験の有無に関連し、また知的障害の特性や選手個人に関する知識、指導技術が不安感や個人的達成感の低下を招いていたことを明らかにした。さらに若年層ボランティアが継続参加に至るプロセスについて、活動を継続するほど継続に肯定的に作用する要因が増す一方、時間的余裕の減少や保護同士の人間関係の軋轢などの否定的要因も増大していたこと、またそれらのジレンマの経験が指導者としての使命感を形成していたことを、事例検討から明らかにした。さらにボランティアと関わる知的障害者本人及びその保護者に対しても指導者ニーズや若年層に対する認識を示した。

公開審査を含む審査の議論のなかでは、知的障害者スポーツボランティアの実際についての確認の他、ボランティアマネジメントモデル構築を試みるにあたって、どのような分析から修正を試みたかの対応関係のわかりにくさや検証・評価に関する議論の不十分さが指摘されたが、これらは今後の課題とすべき点であろう。

(最終試験結果の要旨)

障害者スポーツが長らく身体障害者へのリハビリテーションに偏重してきた経緯から、知的障害者スポーツを支える人材育成の研究は乏しいなか、若年ボランティアの活動継続・離脱要因に注目したマネジメントモデルの構築を試みている点は、今後の知的障害者の地域参加促進において多くの示唆を提供すると考えられる。以上より、審査委員全員一致で、博士論文にふさわしいものであると判断された。